

図書館における「現場」と「研究」の継往開来

村上 幸二

(I-LISS Japan 事務局長補佐)

今から数年前、ある中堅の図書館員にどんな図書館専門誌を読んでいるのか聞いたことがある。その回答は意外なもの、というより少なからず予感があった。その図書館員曰く、論文が主体の雑誌は現場の業務にあまり役立たないものが多いことから最近読んでいないとのことであった。図書館の研究上、必須の資源ともいえるべき「現場」であるが、確かに「研究誌」上では、図書館の現場に関係した論文掲載数はそれほど多くはない。この領域を扱った研究(村上幸二、志保田務「図書館サービスの現場と「研究」の相関: 図書館情報学関係誌の投稿規程を中心に」『図書館界』70(2), 2018.7, p.432-441)によれば、主要な図書館情報学関係誌に掲載される「論文」は、「研究」をまとめたもので、新規性や独創的、有用な知見を示す考察が求められることをそれぞれの投稿規程から読み取っている。つまり、いかに現場に役立つかといった視点は重視されないわけであるが、同研究でも取り上げているように、図書館の「現場」に役立つ研究の意義について力説した先人の声(伊藤昭治「〈座標〉業績づくり」『図書館界』55(2), 2003.7, p.61)を忘れてはならないだろう。

90年代の話になるが、「電算化」という呼び方で手作業による図書館業務がコンピュータで処理する方法にとって代わるこの時期、現場の図書館員によく見られた光景といえば、とにかく図書館専門誌に目を通して、他館の図書館員とも積極的に情報交換し、時には図書館情報学研究者からの有益な意見を参考にしながら、日々「業務」と「研究」を行う姿であったと思う。今では想像できないかも知れないが、当時、図書館のコンピュータシステムで注目されていたのがオーダーメイドによる図書館システムであった。現在の図書館システムの主流はトータル・パッケージで、システムの導入時からあらゆる機能が備わっているが、オーダーメイドの図書館システムでは、基本的な枠組みが用意されているだけで、それぞれの中身については図書館側の要望に応じてSEがプログラミングを行い、諸機能が実装されていくものであった。この頃、これまでの手書きで行っていた業務をどのようにコンピュータで処理できるかについて、手探り状態ながら様々な記事を読んで自分なりに勉強し、SEと打合せを繰り返しながら図書館業務の「電算化」を進めていったことを思い出す。かつて手作業の雑誌業務にはビジュアルレコーダーがあり、雑誌の受入から支払はもちろんのこと、都度払いから年間一括払い、さらには製本に関わる業務もすべて行うことができた。単に「電算化」といっても、こういった業務の流れを見直し、いかに効率よく且つ正確に行えるかを考えながらの仕事であった。幸いにもこの頃は、現場に関係した研究が豊富に見られ、実際の業務にとっても役立った。

2022年10月、第6回I-LISS国際会議(6th I-LISS International Conference 2022 – Revitalizing the Libraries to the Android Society)が開催された。大会テーマにもあるように、図書館がiPadやアンドロイド携帯などの使い方なども含む基本的な情報リテラシーの育成を提供することも視野に入れた「情報へのアクセス」を保障する機関であることが強調されている。図書館の研究テーマと

して「情報化」や「電子化」が取り上げられるようになって久しいが、DXの推進に伴ってますますその傾向は強まるものと予想される。人工知能の研究開発に特化した企業である OpenAI が開発した ChatGPT が、2023 年の年明け頃から日本でも頻繁にニュースに取り上げられ話題となっている。このようなチャット型であらゆる質問に回答してくれる AI の登場に、図書館が行う情報サービスにも様々な形で影響を与えることは間違いなさそうである。そういった意味でも、この方面での研究は現場も注目するものになるのではないだろうか。

2017 年 8 月に I-LISS の前身である LISSASPAC の日本支部設立セレモニーが行われ、今年 (2023 年) で 7 年目を迎えた。学会誌の『Journal of I-LISS Japan』は Vol.5, No.2 が刊行された。これからの図書館研究の素材の可能性とともに、本学会・本誌のますますの展開を期待したい。